

第9章 担いあうまちづくり

第1節 連合町内会・町内会活動

登別市連合町内会

昭和59（1984）年12月26日に、登別市連合町内会連絡協議会（以下「旧市連町」）が創立した。昭和57年頃、本市内で町内会活動中にけがによる補償問題が発生し、町内会独自では補償もままならなかったことから、北海道町内会連合会の共済制度に加入する動きが起こった。しかし、当時は市全体の連合町内会でなければ北海道町内会連合会の共済制度に加入できなかったために、これを契機に各地区の連合町内会が集まり「各連合町内会相互の連絡協調と明るく住みよい街づくりを指して、地域の市民活動を助長すること」を目的として創立した。当時、本市内には、10の地区連合町内会（以下「地区連」）と80の単位町内会が結成されていたが、これらを束ねる組織が誕生したことで、情報が共有化され相互の連携ができるようになり、課題解決に向けての協力関係が作られ、その後の単位町内会発展にとって大きな原動力となった。

しかし、事務局が登別市社会福祉協議会に置かれたことで、行政との窓口が旧市連町は社会福祉協議会で、単位町内会は市民課であることから支障が多く、不便な状況にあった。そのために、平成7（1995）年4月には、市民課に旧市連町の事務局を置くことになり、行政との対応窓口が一本化され、連絡調整が円滑になり単位町内会運営上にも良い

結果となった。

平成8年度の総会において組織の見直しが行われ、登別市連合町内会（以下「市連町」）に名称を変更した。また、市連町の構成要件を「地区連」だったものから「町内会、自治会などの地域住民組織」に拡大し、組織運営の充実と下部組織への活動理解並びに浸透化を目指し、活動の活性化を図った。さらには、会の目的に「住民福祉を増進し」を加え、地域住民のための福祉活動の充実を目指した。平成9年度からは、市連町の役員に女性も加わるようになりさらに活性化された。

平成19年11月20日には、社会福祉協議会と連携した「小地域ネットワーク活動」の実践、単位町内会の自主防災組織結成の指導、意識の高揚、全市花いっぱい運動、春と秋の全市クリーン作戦などの活動が評価されて、市連町が地方自治法施行60周年を記念した総務大臣表彰・団体表彰を受けた。

さらには、平成24年の暴風雪による大規模停電を契機に、地域住民を守るために正確で確実な情報伝達を行えるよう緊急災害時情報伝達網を整備し、災害訓練を行い意識啓発に努めたことが評価され、平成30年9月には市連町が内閣府の防災功労者・防災担当大臣表彰を受けた。

平成29年5月30日に「改正個人情報保護法」が施行されることになり、5千人以下の町内会・自治会もその対象となった際には、施行に先立って3月22日に市連町が改正法への対応に関する研修会を行い、単位町内会役員の不安解消に努めた。

共同住宅の増加、単身者や短期間居住者の増加など様々な理由から未加入世帯も増加しており、本市における町内会への加入率は現在72%である。安心して暮らせるまちづくりのためにはより多くの市民の加入が

必要であるので、市連町と単位町内会が連携し加入を勧めるパンフレットを作成し、加入促進に努めている。

財政面では、創立当初は、本市からの助成金2万1千円、社会福祉協議会からの助成金3万円と各地区連から5千円（合計5万円）の負担金のみで少額な予算であった。平成2年度には本市からの助成金が10万円に、平成5年度には25万円に増額され、平成15年からは240万円が助成されている。

現在、11の地区連と95の単位町内会で構成されており、各地区連との連絡調整や地区活動の助長、住民福祉の向上、先進都市との研修交流、自主防災組織の推進と支援、ごみ減量化と再資源の促進など幅広い活動を展開している。

歴代会長

三井 松雄	昭和59年度～昭和62年度
大家 保治	昭和63年度
高橋 豊	平成元年度～平成15年度
山田 正幸	平成16年度～平成27年度
中川 信市	平成28年度～現在

町内会活動

少子高齢化や核家族化が進み、地域においては近隣関係の希薄化などで地域生活課題はますます複雑化かつ多様化している。特に災害時における避難態勢の確立と高齢者や障がい者など誰もが孤立化することなく安心して暮らすことができるような地域づくりが必要となっている。そのために、各地区連・単位町内会・町

会・自治会の自主的な隣人愛に根ざした地域活動と行政等との協働による「ふれあい・助けあい・支え合い」の全市的な活動を通して地域住民の「絆と和」を広げて、安心で安全な明るく住みよい「観光と福祉のまち登別」への地域づくりをめざし活動を行っている。

本市内の町内会では次のような活動をしている。

安全で安心なまちづくり

- ・ 町内会で防犯灯を設置し町内会の会費で電気料金を負担し明るい地域づくりに努めている。
- ・ 空き巣ねらいなどの犯罪を防ぐため、また子どもたちの交通安全を守るため、夜間の防犯パトロールや登校下校時の見守りを行っている。

きれいで快適なまちづくり

- ・ ごみステーションは町内会で管理している。周囲を清掃し、ごみが散乱しないようごみネットを購入してきれいなごみステーションに努めている。
- ・ まちかどや公園などの清掃や草取りなどを行い、また花を植えるなど美しく住みよい地域づくりを進めている。

ふれあいのあるまちづくり

- ・ 地域のまつり、運動会、文化祭、温泉日帰り懇親会、ラジオ体操などの行事や敬老会等を通じて気軽に交流できる地域づくりに努めている。

情報の伝達

- ・ 広報のぼりべつの配布や生活に欠かせない市や町内会からの知

らせを町内会回覧板で知らせている。

災害対策

・日頃から町内会活動を通して隣近所との親睦を深め、いざという時の助けあいや安否確認できる地域づくりに努めている。
また、地域の課題を話し合い、本市への要望の窓口となっている。

第2節 特定非営利活動法人

特定非営利活動法人とは、平成10（1998）年12月に施行された「特定非営利活動促進法」に基づいて不特定かつ多数の利益の増進に寄与する活動（特定非営利活動）を行うことを主な目的として設立された法人（以下「NPO法人」）のことである。本市内には、令和2（2020）年3月末現在で11団体ある。各法人の目的、主な活動は次のとおりである。

いぶりたすけ愛

助け合いの精神に基づき、地域市民が相互に、対等平等な立場で、自主的な福祉サービス活動を行い、誰もが安心して、その人らしく暮らしていける長寿社会を創設することによって福祉の増進に努めることを目的としている。

平成7（1995）年4月15日に「登別ライフケアを考える会」を設立し、家事援助、高齢者の話し相手、産前産後の手伝い、留守番、散髪、保育園の送迎、通院送迎などの活動を始めた。「介護保険法」が制定された平成9年5月17日に「いぶりたすけ愛」に名称変更し、平成11年3

月31日にNPO法人の認証を受けた。その後、訪問介護や居宅介護支援、福祉有償運送などの事業を始め、現在はサロンたすけ愛の家、高齢者生き生きグループリビングの運営のほか、子育てスペースやカフェレストランを運営する社会起業家集団「ともかな」の支援協力を行っている。

北海道野生動物

野生動物等が人的被害やその危険性の排除及び有リンジャー 害鳥獣による農林産業等に及ぼす被害の防止を図るための駆除に関する活動や野生鳥獣の捕獲器具の開発を行い、さらに動物保護活動及び有害鳥獣からの安全性が地域住民に確保されることと野生動物との共生ができる地域社会づくりへの貢献活動をおし、もって公益の増進に寄与することを目的としている。

平成17（2005）年8月5日にNPO法人の認証を受けた。北海道の有害鳥獣の駆除捕獲許可を得て、本市内のエゾシカの捕獲を行っている。

登別自然活動支援組織

モモンガくらぶ

自然活動を通じて人と人、人と自然のふれあいを促進し、子どもから大人まですべての人が豊かな自然を五感で感じ、遊びの中で感動し、自然の大切さを学び、自然の価値と自然を大切にすることを通じ、豊かな人間性を創造し、自然と共生できる暮らしとまちづくりに寄与することを目的とし、地域づくり推進事業、自然活動支援事業、指定管理委託事業、子育て支援事業、人材育成事業に取り組んでいる。

平成14（2002）年4月にオープンした市ネイチャーセンターふおれすと鉾山の活動を支援するボランティア組織として同年9月7日に発

足した「登別市ネイチャーセンターふおれすと鉱山活動支援組織モモンガくらぶ」が前身で、平成17年8月17日にNPO法人の認証を受ける。そして、平成18年4月1日に市ネイチャーセンターの清掃と夜間管理業務を受託し、翌平成19年4月1日からは同センターの指定管理者に、平成30年8月1日からは市民活動センターのぼりんの指定管理者となる。

このほか、平成22年5月21日からの小学生の放課後居場所づくり「かめつおくらぶ」の実施、同年6月1日からの地域子育て支援拠点（ひろば型）事業「富岸子育てひろば」の受託などの子育て支援事業のほか、コーザン・ネイチャーガイドの育成を始め多様な事業に取り組んでいる。

ライフサポート

高齢者や障がい者、子どもなど弱者と呼ばれる市民に対して、家事や育児援助、病院通院介助、住宅支援などを補う市民サポート事業や心豊かに暮らせる魅力的なまちづくりを支援する事業など市民の立場に立った生活支援を行い、また他の同様の活動をしている団体と協働を推進して地域の活性化や福祉の増進に寄与することを目的としている。

平成18（2006）年10月31日にNPO法人の認証を受け、高齢者・障がい者を対象とした絵手紙サークルの開催や独居舎、高齢者への買い物サポートなどの支援事業やまちづくり支援の取り組みとして公園のトイレ清掃や各種イベントへの出店を行っている。また、平成25年より毎年度福祉環境の向上を目的として社会福祉施設や社会福祉団体にポータブル電源やソーラー発電システムなどを寄付している。

リンパ健康学

リンパ学と現代医学の知識の啓発、この知識に基づき研究したリンパ健康学の技術の普及、人と医学を繋ぐ中間支援、資格者の認定をとおして、人々の病気や症状の予防及び健康の増進を図り、人と医学が繋がる地域とまちづくりの環境を整えることを目的としている。

平成19（2007）年5月10日にNPO法人の認証を受け、リンパ学と医学及びリンパ健康学の啓発と普及のための無料リンパ学習会や人と医学を繋ぐ中間支援として「からだのヒント教室」を開催している。また、リンパ健康学の技術とリンパ学と医学の知識を伝達する研修会を開催している。

知里森舎

アイヌ民族の歴史・文化・自然観から学び、アイヌ文化を担ってきた知里幸恵をはじめとする人々の業績を正しく評価し、広く伝えてゆく活動を行うとともにアイヌ文化についての関心を高め、その発展・普及・啓発・振興などに寄与することを目的としている。

平成9年に設立し、平成19年7月3日にNPO法人の認証を受けた。「知里幸恵 銀のしずく記念館」の管理運営を行っているほか、知里幸恵フォーラムやアイヌ神謡集の学習会、アイヌ語地名のフィールドワークなどを行っている（第2編第10章参照）。

ゆめみぐる

高齢者・障がい者・子どもの見守りと、誰もが安心して暮らせる福祉のまちづくりをめざし、高齢者自身が主役となって運営する「ふれあいいきいきサロン」や、障がい者が活動

できる「地域の事業・行事」への参加及び、子育てを地域で支える「ふれあい子育てサロン」及び、当事者同士が楽しく生きがいをもって、積極的に社会参加を進める仲間づくりを行うため地域食堂事業等を行い、地域の人が気楽に集まる居場所づくりと地域が実施する文化芸術及び安全活動を中心に福祉活動に参画し、また公共施設の運営管理を行うことにより、地域福祉や福祉のまちづくりに貢献することを目的としている。

永年にわたり町内会活動を中心として、地域活動を行ってきた有志が集まり従来町内では取り組めなかった活動を推進するために設立し、平成20(2008)年10月24日にNPO法人の認証を受けた。高齢者が主役となつて運営する「ふれあいきいきサロン」、障がい者が自立した生活を送るための「地域活動への参画」、子育てを地域で支える「ふれあい子育てサロン」、子どもが自由に活動できる「放課後児童クラブ」や「放課後子ども教室」の活動とこれらの活動を支援するための「地域食堂の運営」、「配食事業」、「朝市による買い物支援」を行っている。地域食堂は、地域の人が気軽に集える場所として自慢の手打ちそばをはじめ、地元の食材で料理した特製定食を低価格で提供し、食堂に来られない人や買い物に來られない人へは配食を行うとともに声かけを行い安否確認も行っており、定期的に朝市も開催し、高齢者が近くで買い物ができるように支援している。「放課後子ども教室」は、学校の授業が終了した後の活動拠点(居場所)として学校では体験できない行事やスポーツを通じて子どもの健全な育成に取り組んでいる。

絆ネットワーク

人は「老いずに」、「病気になるずに」、「介護を受けずに」、「自宅で」、「地域の人々と」長く生きたいといった地域に暮らす人々の真の願いを基本理念に、助け合い、支え合う、きずな社会の実現をめざし、誰もが主体的にいきいきと安心して生活できるよう、あらゆる支援体制を整備し、地域福祉に寄与すること目的としている。

平成22(2010)年3月17日にNPO法人の認証を受け、高齢者と障がい者の共生施設の運営や福祉車両(昇降機付軽自動車福祉車両)の貸与、介護用品の販売などを行っている。

おにスポ

地域にゆかりのある人々に対して、文化、スポーツを通じたコミュニティ形成に関する事業を行い、多くの市民が笑顔溢れる社会づくりに努めるほか、スポーツの普及、振興及び地域社会の発展に寄与することを目的としている。

平成18(2006)年に国の「スポーツ振興基本計画」の改定により、登別市でも「多様目、多世代、多指向」という多様性をもった総合型地域スポーツクラブを育成することとなった。

平成20年に文部科学省の育成指定クラブとなつた登別地域総合型スポーツクラブ設立準備委員会は、先進地の視察等を重ね、平成22年2月に市内初の総合型地域スポーツクラブとなる「スポーツコミュニティのほりべつクラブ」おにスポが発足、平成25年3月15日にはNPO法人の認証を受けた。

本市内の小中学校への体育支援員の派遣を行っている。また、平成25年度から29年度にかけて市民活動センターのほりべつの指定管理を委託し

て市民活動の支援に取り組み、平成25年12月から同26年11月にかけて緊急雇用創出推進事業（起業支援型）の「スポーツを活用した地域コミュニティ再生事業」を受託して、市内に運動教室を開設して市民が気軽にスポーツに親しむ環境づくりに取り組んだ。また、毎年5月に開催される「こいのぼりマラソン」では、実行委員会に加わり準備や当日のタイム計測・沿道整理などを行っている。

また、市外にも活動の幅を広げ、平成24年度から同26年度にかけては福島県の地域づくり総合支援事業（地域協働モデル支援事業）の補助金を受けて「仮設住宅における生きがいづくり構築支援事業」に取り組み、福島県葛尾村に木工細工を製作し販売する夢工房葛桜かつらぎを開設して主に高齢男性の生きがいづくりに取り組んだ。平成27年度にはクラウドファンディングによって同工房の継続資金の調達を行った。

キウシト湿原・登別

登別市民やキウシト湿原に関心を持つ人々や来訪者に対して、キウシト湿原の保全と管理に関する事業を行い、市民の潤いのある生活の創造や湿原学習に寄与することを目的としている。

平成9（1997）年にキウシト湿原が希少な植物の生息地であり、貴重な自然環境であることが確認されて以来、外来植物の駆除等の保全作業や湿原に生息している生物や水質の調査、ミズバショウやホタルなどの市民観察会など、キウシト湿原の保全と活用に関する様々な活動を行ってきた。平成25年7月8日にNPO法人の認証を受け、平成27年4月29日に開園した都市公園「キウシト湿原」の指定管理を受託し、前述の取組のほか、市内の小学校の総合学習なども行っている。平成26年に

は、こうした取組が評価され前田一步園賞を受賞している。

Let's kids 広く一般市民、教師や教師を志す学生に対して、子どもへの適切な指導方法及び学級

うとねっと 経営術を学ぶための研修・講習会の企画・開催に関する事業、児童・生徒とその保護者に対して、体験学習、まちづくりに関する事業等を行い、教育技術の向上と子どもの健全育成に寄与することを目的としている。

平成29（2017）年3月27日にNPO法人の認証を受け、子どもや保護者を対象とした「子どもわくわく教室」や教師や教師を志す学生などを対象とした研修会・セミナーなどを開催している。

のぼりべつNPOネット

のぼりべつNPOネットは、本市内の市民団体が横の繋がりをもち情報交換をしながら緩やかなネットワークを構築し、お互いの活動をより高めていくとともに、地域づくり、人づくりに貢献することを目的に、平成18（2006）年11月29日に発足した。入会資格は、会の目的に賛同し、活動できる団体となっており、現在、いぶりたすけ愛、登別自然活動支援組織モモンガくらぶ、ライフサポート、知里森舎、リンパ健康学普及協会、ゆめみーる、おにスポ、絆ネットワークの8団体が加盟している。主な活動は、次のとおりである。

- ① 地域づくり、人づくりに関わる取組
- ② 市内で活動する市民団体との交流の促進及びネットワークづくり
- ③ 行政との協働と地域づくりの担い手として市民活動における情報収集や調査、研究し、行政に提言

④ 地域事業への参加、協力、提案

第3節 ボランティア活動

ボランティア活動は、個人の自発的な意思に基づく自主的な活動であり、活動者個人の自己実現への欲求や社会参加意欲が充足されるだけでなく、社会においてはその活動の広がりによって、社会貢献・社会活動等への関心が高まり、様々な構成員が共に支え合い、交流する地域づくりが進むなど、大きな意義を持っている。

平成7（1995）年1月17日に発生した阪神・淡路大震災では、全国から多くのボランティアが被災地へ駆けつけて、被災者の支援にあたった。その動きは、後に日本の「ボランティア元年」とも呼ばれ、災害救援をはじめ、様々な活動につながった。

本市内では、高齢者や障がい者を対象とした活動、子どもや青少年を対象とした活動、災害での被災者を支援する活動、自然や環境を守るための活動、芸術・文化、安心・安全なまちづくり、各種イベント等の運営スタッフ、観光ガイド、国際交流・国際協力活動、募金活動など多様な分野での活動が行われている。

登別市

ボランティアセンター

本市におけるボランティア活動の中核を担っているのは、登別市社会福祉協議会である。同協議会では、活動の大きな柱の一つとして「ボランティア活動の推進」を掲げており、その実践の一つとして「登別市ボランティアセ

ンター」事業がある。

昭和51（1976）年11月、「ボランティアスクール」を開校した。ボランティアの実践活動を進めるための知識や技術を学ぶためのもので、4日間にわたるハードスケジュールな内容にもかかわらず、女性を中心に30名を超える市民が参加した。市民から、再度の実施要望にこたえ昭和52年、平成元（1989）年にも開催した。

昭和55（1980）年には、本市内で初めての「ボランティア活動研修会」を開催した。ボランティア活動をしている市民のほか、町内会関係者、社会福祉関係者などが参加して、「社会福祉とボランティア」と題した基調講演や日頃活動している体験者からの実践報告が行われ、約180人の参加者が熱心に耳を傾けた。

平成5（1993）年2月25日、社会福祉協議会の下部組織として、「登別市ボランティアセンター」が設立された。「ボランティアセンター」の役割は、ボランティア情報の収集・発信をはじめ、ボランティア活動のコーディネート業務、ボランティアに関する教育・研修の場や情報交換の場の提供などである。5月には、早速「市民ボランティア講座」（11講座）を開講した。11月までのロングラン講座であったが79人の市民が参加した。平成15年までの間に7回行われ、受講者は延べ300名を超えた。それらの人々は、本市内のボランティアグループに加入し活動するほか、共に学んだ仲間同士で新たなボランティアグループを結成するなど、本市におけるボランティア活動の中心メンバーとして活躍している。

平成8年7月には、夏休み期間と重なる7～8月に約1か月間の「ボランティア活動体験月間」を設定し、市民が希望するボランティアを自

由に体験できる新事業を開始した。胆振管内では初の事業で、体験活動を通して地域の福祉問題に触れてみようとの企画である。平成16年から、「ボランティア体験プログラム」に名称を変え、体験期間も7月から3月までに拡大した。市内の福祉施設や病院、ボランティア団体等からの協力も得られ、現在は50以上の体験メニューが用意されている。

令和元（2019）年度現在、登別市社会福祉協議会の「ボランティアセンター」が登録・把握団体数は57団体となっている。

具体的なボランティア登録・把握団体及び地域ボランティアについては、資料編の一覧を参照いただきたい。

のぼりべつ元鬼協議会

平成22（2010）年に市制施行40周年を記念して市民会館で開催された「のぼりべつ元鬼まつり」は、本市内で活動するまちづくり団体が実行委員会を組織して主催した。同まつりの後、「まちづくり団体の連携を今後も継続していこう」との声が各団体からあり、そのための協議会の組織を求める声が上がっていた。

平成23年8月、協議会設立に向けて協議を重ねてきた幌別活性化推進会議などのまちづくり団体、市連町など13団体が参加して「のぼりべつ元鬼協議会」を設立した。活動の目的は、各団体等の活動を理解し合い、情報の共有やつながりを強化することで、地域活性化や活動の促進につながっていくこととした。

同協議会は、平成23年11月に鬼などに仮装して道路沿いのゴミ拾いを行う「クリーンウォーク！元鬼集合!!」を行い、その後毎年実施しているほか、平成24年11月に発生した大規模停電や、平成30年9月に発生し



クリーンウォークの様子

た北海道胆振東部大地震で北海道全域が停電した際に市民会館で炊き出しを行い、本市内の避難所に配達して、避難者に暖かい食事の提供を行った。また、生活者としての経験が豊富な高齢者が多い市連町と、行動力に優れた若手の多い同協議会が意見交換会を開催して、まちの活性化の方策などについて意見を交換した。

平成27年5月、設立5周年を迎えた同協議会は、本市に各種イベントで活用可能なコーン標識と誘導棒などの備品を寄贈した。このときに寄贈を受けた備品は、例年5月に開催されるこいのぼりマラソンなどで活用されている。

平成30年8月に市制施行50周年に向けて発足した記念事業市民実行委員会では、登別商工会議所や登別国際観光コンベンション協会などと並んで設立発起人となり、記念事業の一環として行われる市民主体の事業の企画立案に向けて大きな貢献をしている。

第4節 市内の祭り

市民まつり

昭和50（1975）年9月28日、幌別小学校グラウンドで、初の市民まつりが開かれた。この年の4月に実施された統一地方選挙で市長に当選した田村仙一郎が、「地域間の市民の連帯感と人の和をさらに深めるため『市民まつり』を実施しよう」と市内にある65団体に呼びかけた。呼びかけに応じた多くの市民からの賛同を得て、その年に「市民まつり」を実施することが決まったのである。

実施にあたっては、連合町内会や社会福祉協議会、老人クラブ連合会などの民間36団体によって実行委員会（実行委員長・田村市長）が組織され、早速祭りの実施計画づくりと、それぞれの役割分担などが決められた。

市民まつりの当日、幌別小学校グラウンドいっぱいには設けられた「ふるさと広場」では、商店会、ライオンズクラブ、青年会議所、漁業協同組合など数多くの団体、市民の協力による「縁日広場」、「チャリティーオークション」などで開店前から市民が来場し、ものの1時間ほどで売り切れてしまうという大盛況であった。

竹馬やフラフープなどを用意し、子どもたちの自由な遊び場として開放されたチビツ子広場や特設舞台では、チビツ子歌合戦、北海太鼓、民謡、湯鬼神かぐら、獅子舞、軽音楽、陸上自衛隊第7師団による演奏会などが次々に披露され、ミス登別コンテストも行われた。

広場の中央に設けられたやぐらの周りでは、子どもたちや一般市民が参加しての仮装おどりが行われ、三重、四重もの輪をつくった盛大な踊

りが繰り広げられた。

ふるさと広場での催しとは別に、本市内4地区で田村市長や室久吉市議会議長、中牧昇登別観光協会会長などの実行委員会役員が総出演した市内パレードが行われ、登別大谷高等学校のバトンガール、自衛隊のブラスパンド、ミス登別などが本市内を一巡し、駆けつけた沿道の市民から笑顔で迎えられた。

初めての試みに加え、短い準備期間にも関わらず、メイン会場（幌別小学校グラウンド）には大勢の市民が訪れ、大にぎわいのうちに終了した。

翌年以降、会場を幌別中学校グラウンドや中央町地区へ移した翌年以降も、多くの市民が集まりカラオケ大会など盛りだくさんの催しを楽しみ、夜には幌別川河畔で花火大会が繰り上げられるなど、夏から秋にかけての市民イベントとして昭和57年（第8回）まで続けられた。

のぼりべつ

昭和58（1983）年8月6、7日の2日間、富士橋、提灯まつり 銀座通りの沿道にずらっと提灯がぶら下がり、中央地

区の商店街を灯す、「第1回のぼりべつ提灯まつり」が行われた。

この「提灯まつり」は、市や商工会議所のほか中央地区の商店会、観光協会、青年会議所などが運営の主体となつて、前年まで続けてきた「市民まつり」に商業まつりの要素を加味したもので、目玉は商店街にとまる約4千個の提灯と、500個ほどの提灯を使った2基の「巨大なちようちん山車」であった。

夕方からのオープニングセレモニーでは、中浜元三郎市長、上田邦男登別商工会議所会頭が祝辞を述べ、点灯式では2人のほか室久吉市議

議長、高田忠雄道議会議員らがスイッチを入れると商店街に飾られた提灯が一斉に灯り、夏の夜空に美しく映えた。

昼間は、銀座通りの歩行者天国内でディスコダンス、ローラースケート、綱引き、どじょうつかみなどの各種イベントが行われ、夜には百太鼓や自衛隊太鼓を囲んで市民約800人が参加した鬼踊りの大群舞が行われた。鬼の面、浴衣、法被姿の市民が踊り、まつりは最高潮に達した。まつりは、回を追うごとに提灯の数が増えたり、会場も幌別駅前方面に移動したりするなどし、平成7（1995）年（第13回）まで続けられた。

のぼりべつ 平成8（1996）年に「のぼりべつ提灯まつり」か**豊水まつり** ー、地元恵まれた水をテーマに名称を変更した「豊水まつり」がJR幌別駅西口前広場と平成6年12月にオープンしたアイニス前を会場に始まった。

初回は、アイニス前の中央通り会場が歩行者天国・遊びの広場として開放され、「水のアーチ」や触れる「ミニ水族館」など水にちなんだイベントが行われ、西口前広場では太鼓演奏や歌謡ショーなどのステージイベントと市民手づくりの露天約30店が立ち並んだ。

夜に入つて、約1千人が威勢のよい掛け声とともにエネルギーを踊りで練り歩く「鬼踊り」がスタートすると、沿道の市民ものぼりべつの夏を満喫した。

第2回（平成9年7月19日、20日）からは、温泉以外の「登別」をイメージして軽快なリズムで踊る「豊水トントン」が誕生し、多くの市民が参加して楽しむまつりへと育つていった。

しかしながら、市民まつりから数えて38年間にわたつて行われてきた中央地区の夏祭りも、地元飲食店の閉鎖や店主の高齢化などを理由に平成24年（第16回）をもって終了した。

のぼりべつ 「豊水まつり」の終了を惜しむ声に応えるように、**夏祭り** 成25（2013）年に入り、まちづくり団体「のぼりべつ元鬼協議会」などが、実行委員会を組織して、「のぼりべつ夏祭り〜いぶり食と文化の祭典」と題した新たな夏のイベントを企画した。

平成25年8月10日、11日の両日、川上総合公園を会場に日本工学院北海道専門学校や胆振総合振興局職員が結成した「イベント応援隊」が参加するなどして、登別ブランド推奨品をはじめ胆振管内の地元食材を使った和・洋の飲食店が30以上の露店を連ね、自慢の味を披露した。

第2回からは、登別温泉の地獄の谷の鬼火が参加したほか、食の広場には日高を加えた「ritan マルシェ」と題した特産コーナーを開設、胆振・日高の町名や店舗名ののぼりがずらりと並んだ。

ステージイベントの一つとして、大食いタレントのアンジェラ佐藤（札幌市）を招へいして登別のご当地グルメ「登別閻魔焼きそば」の大食い対決を行ったほか、白菊幼稚園の園児によるバルーン演技の披露などが行われ、来場した市民を楽しませている。

回を重ねるごとに露店数も増えて、多いときには50軒を数える年もあった。まだまだ発展途上であり今後が楽しみである。

市制施行50周年を迎えた令和2（2020）年には、第2回ののぼりべつ元鬼まつりとの共同開催を予定していたが、新型コロナウイルス感染症の拡大防止のため、残念ながら開催が中止された。

幌別地区

幌別地区手づくり祭りの前身は、例年8月22日から手づくり祭り 24日までの3日間に行われていた刈田神社の例大祭である。毎年、約2000の露店が並び室蘭・登別地域でも一、二を争う多くの人出で賑わう祭りであった。

昭和63年11月に室蘭市内で発生した暴力団組長射殺事件を契機に室蘭、登別両市内で翌年2月までの3か月間に暴力団員による発砲事件が続発した。この地域では毎年30近い祭りが開かれるが、露店商の大部分を暴力団関係者が占めていると言われていた。警察の誘導もあったが、これをきっかけに、それぞれの祭りやイベントから暴力団関係者を締め出す運動が進められた。

その結果、平成元（1989）年から「プロ」の露店商が出なくなり、地域の祭りには町内会や商店会、小中学校のPTAなど市民有志による「手づくり露店」が重要な役割を果たすことになった。

刈田神社の祭典も従来の3日間から2日間に短縮し、約50の「手づくり露店」が祭りの風情を醸し出すのに一役買っている。

しかし、他に本業を持つ出店者からは、「平日に出店することは大変」との声が強く、平成14年からは刈田神社の例大祭とは分離して、9月第1週の土曜日と日曜日に「幌別地区手づくり祭り」の名称で開催することとなり、登別市暴力追放運動推進団体連絡協議会や登別交通安全協会、中央地区の単位町内会等が集まって幌別地区手づくり祭り実行委員会を組織し、場所割りの抽選から後片付けの指導など露店に関わる業務を担っているのである。

今ではすっかり定着し、刈田神社の神輿渡御や幌別鉾山獅子舞が披露されているほか、祭りに合わせて、姉妹都市の白石市が昭和62年から、

神奈川県海老名市は平成24年（平成23年は出店予定であったが、悪天候により祭りが中止になったため参加しなかった。）からそれぞれの観光と物産展を開催している。

わくわく広場

のぼりべつ

「わくわく広場ののぼりべつ」は、平成2（1990）年7月の登別マリンパークニクスのオープンを記念してはじまった、花をテーマにした地域イベント「フラワーパレットののぼりべつ」がその前身で、登別まちづくり促進期成会と地元の町内会や商店会、飲食店組合、婦人会、青年会などによる手づくりイベントであった。

当初は、JR登別駅前通りが会場であったが、平成7年から登別ビーチパーク内（登別マリンパークニクス前広場）に会場を移して毎年7月に実施され、例年、多彩なステージや各祭りゾーンで繰り広げられる盛りだくさんのイベントに夜遅くまで大勢の市民でにぎわっている。

会場には色とりどりの花のオブジェが飾られ、フリーマーケットや花市などの露店がずらりと並び、忍者ショーなど、テーマパークのキャラクターが登場するマリンパークや時代村のお膝元である登別地区ならではの演出が評判になり、他地域から訪れる人も多い。

芝生広場で行われる野外プロレスショーやフィナーレに行われる登別温泉宿泊券など豪華景品が当たるビンゴゲームは、人气的になっている。

登別グリーン・ピア

サマーフェスティバル

昭和63（1988）年にはじまった「登別グリーン・ピア サマーフェスティバル」

は、若草中央公園を会場に、美園・若草・新生地区の登別グリーン・ピア商店会が、地域の町内会などと協力して実施している地域のイベントである。

会場には、金魚すくい、ヨーヨー釣り、おもちゃ、焼き鳥など約30店の手づくり露店が店開きし、夏休み中の子どもたちに好評を博している。特設ステージでは、太鼓演奏やカラオケ大会、ビンゴなどのほか、市内ではなかなか見ることが出来ない、東映の戦隊ヒーローのキャラクターショーが隔年で催されるなど、毎回、子どもたちが楽しみにしていた。近年は、ヒップホップなどのダンスパフォーマンスや生バンド演奏、歌謡ショーなども行われている。

大地の祭典

昭和59（1984）年9月、札内町の日本工学院専門学校前の市有地で、母なる大地に感謝し、酪農、畜産物などをPRしようと本市内の若手農業経営者らが中心となつて第1回「大地の祭典」（のぼりべつ農業まつり）が開催された。

登別農業後継者クラブ、ハッピー牧場、登別養鶏ファーム、登別肉牛生産飼育組合の有志らにより結成された実行委員会が「登別での酪農と畜産の普及と観光資源化」を目指して企画したもので、祭りの中心となるのは地元で生産した牛肉、羊肉のバーベキュー、しゃぶしゃぶ、焼き鳥コーナーをはじめ肉、卵、牛乳、野菜などの生產品の即売会など味覚イベントのほか、羊の毛刈り、羊の競争、羊毛紡ぎの実演、綱引き大会、トラクターの試乗会、牧草投げ大会など趣向を凝らした企画が催された。

第2回（昭和60年9月開催）からは、眼下に太平洋を見渡すことができる札内町の「ソーシャルグリーン」（現在、伊奈不動産エゾシカ活用

事業部が食肉処理施設として使用）一帯を使った草地コースを会場に、「北海道クロスカントリーレース」が同時開催されることとなり、道内外から約1千人が参加し、盛り上がりを見せていた。

平成4年の第6回北海道クロスカントリーレース（第9回大地の祭典本登別市を訪れていた東海銀行（現…三菱UFJ銀行）陸上部の竹内監督と当時女子マラソンでアジアのトップランナーだった趙友鳳選手らによる「走り方教室」も開かれた。同陸上部は、大南博美・敬美の双子姉妹などを擁し、平成10年の第18回全日本実業団対抗女子駅伝で優勝した名門チーム。平成3年から10年以上にわたつて本市へ合宿トレーニングに訪れていた（平成16年に廃部）。

登別漁港まつり

昭和53（1978）年9月、登別、虎杖浜、白老の3漁協が大漁祈願と地域の発展を願つて、登別漁港を会場に第1回「登別港まつり」（翌年から「登別漁港まつり」に名称変更）を開催した。港広場のメイン会場では、漁港で水揚げが解禁されたばかりの毛ガニやホッキ貝など海産物の即売会や白老和牛肉の特売なども行われ、買い求める家族連れで初回から黒山の人だかりとなつていた。ステージでは、登別温泉の「湯鬼神かぐら」や白老町の「どさんこ太鼓」などの郷土芸能が披露されたほか、「HBCラジオの公開録音」と新人プロ歌手を招いての新曲発表会などが、また、夜には太平洋をバックに40分以上にわたる豪華な花火大会も催された。第4回の56年からは、海に働く若者らによる「ボート競漕」が港内で繰り広げられた。マスコットガールを含めた1チーム8人（10チーム）が「いそ舟」に乗り込み、往復500メートルの手こぎボートレースに挑戦。漁港まつりにふさ

わしい競技とあって、岸壁には各漁協の組合員家族や一般の見物客が鈴なりになった。「ワツシヨイ、ワツシヨイ」と掛け声に合わせながら、ねじりはち巻き姿の若者らが波しぶきを立てて懸命にボートをこぎ出すと、見物客の間からは熱い声援が飛び交っていた。節目の40回目を迎えた平成29年、漁港の特設会場では、豊漁を祈って餅や菓子を投げる「豊漁まき」が行われていた。まかれた餅2千100個には毛ガニやタラコなどが当たるくくじが付いており、当たりくじを射止めた親子連れに笑みがこぼれる。実行委員の若者からも、「好天に恵まれた今年は、2日間で前年を上回る延べ3万5千人が来場した」と喜びの声が聞こえた。

参考資料

- ・登別市『広報のぼりべつ』各号
- ・北海道新聞社『北海道新聞』各号
- ・室蘭民報社『室蘭民報』各号